

修士論文（要旨）

2026 年 1 月

高齢者の湯治体験が持つ今日的意義
—酸ヶ湯・玉川温泉における利用者の質的分析—

指導 杉澤 秀博 教授

国際学研究科

国際学専攻

老年学学位プログラム

223J5005

大菅 三樹子

Master's Thesis (Abstract)

January 2026

The Contemporary Meaning of the Experiences of
Traditional Hot Spring Cure for Older adults:
A Qualitative Analysis of Users at Sukayu and Tamagawa Onsen

Mikiko Osuga

223J5005

Master of Arts Program in Gerontology

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hidehiro Sugisawa

目次

1. 緒言	1
1) 研究の背景	1
2) 研究の到達点と課題	1
3) 研究の目的	2
2. 方法	3
1) 調査対象とした温泉地	3
2) 調査対象	5
3) 調査方法	5
4) 分析方法	6
5) 倫理的配慮	6
3. 結果	7
1) 研究協力者の概要	7
2) 分析結果	7
4. 考察	12
謝辞	14
文献	14

1. 緒言

1) 研究の背景

かつての慣習的な湯治は、湯治場周辺の農家や漁師が農閑期や休漁期の骨休みを目的として、食料を持参のうえ 10 日以上滞在し、温泉によって心身の疲労を癒し、湯治客同士の交流を通じて英気を養い、再び生業に復帰することを目的としていた。しかし、農林水産業の近代化や従事者の減少に伴い、湯治の様相は大きく変化してきている。今までの湯治とは異なり、現在では、伝統的な湯治が現代の多様なニーズを持つ層によって新たな形で活用されるようになってきている。特に高齢者にとっては、1 週間以上の滞在を通じて心身の健康を回復し、生活の質（QOL）に寄与する場として、再評価されつつあると考えられる。

2) 研究の到達点と課題

湯治場の機能が変化してきていることを背景に、現代における湯治機能や役割を明らかにしようとする研究が小堀（2008）、永岡（2019, 2021）、山川ら（2020）、堀（2023）によって行われている。土地の魅力と療養効果の両方を一定の時間と空間で享受できるウェルネスツーリズムを展開してきた豊富温泉を事例として、湯治場をウェルネスツーリズムの展開場所として再生させる可能性に言及している（永岡 2021）。堀（2023）の研究は、国内ではなくインバウンド観光振興の観点から、外国人観光客を湯治場で受け入れることの可能性と課題について、別府市の鉄輪温泉を事例に分析している。

3) 研究の目的

本研究は、現代の高齢者が湯治を行う目的やその背景にある意図・理由について、利用者への質的調査を通じて明らかにすることを目的とする。本研究における「湯治としての利用」は、1 週間以上の滞在を伴うものと定義する。

本研究の学術的な意義は次の 2 点である。第 1 に、既存研究では、湯治場の機能変容や観光、インバウンド対応などの湯治を含む地域全体を対象とした研究が主であったが、高齢者の湯治利用に特化した研究はほとんど行われていない。この研究は利用者の視点から現代のニーズと課題に関する知見を提供できる。第 2 には、高齢者の健康維持や生活の質の向上に資する湯治の利用可能性を明らかにすることで、観光学や健康科学などの学際的研究にも貢献できる。

実践的な意義としては、次の 2 点がある。第 1 に、高齢者向け観光・保養プログラムの開発に貢献できる。たとえば、長期滞在型のプランや健康増進を目的とした体験型プログラムの開発を設計できるようになる。第 2 には、地域活性化への貢献できる。高齢者の長期滞在は、地域経済への貢献度が高いことから、湯治場を中心とした持続可能な地域振興のモデルとしての可能性がある。

2 研究方法

1) 調査対象とした温泉地

青森県の酸ヶ湯温泉と秋田県の玉川温泉を選定した。その理由は、いずれも長期滞在型の温泉文化を色濃く残している点にある。また、泉質や地域生活が異なる両温泉を比較することで、現代の湯治に共通する価値観や、個別の実践の違いを明らかにできると考えたからである。

2) 調査対象

本研究の対象は 60 歳以上の高齢者であり、温泉地に 7 日以上滞在している者とした。一般的には 65 歳以上を高齢者とするが、65 歳以上に限定した場合、分析に十分なサンプルサイズを確保することが困難なため、本研究では 60 歳以上とした。対象の抽出にあたっては、筆者が直接温泉地に出向き、温泉地の管理者の承諾を得たうえで、看護師を介するか、あるいは筆者が直接利用者に面接の依頼を行なった。

3) 調査方法

調査は半構造化面接法を用いて実施した。インタビューは対象者の同意を得たうえで、IC レコーダー等を用いて録音した。面接は、湯治宿泊施設内のプライバシーが確保された個室にて実施した。

4) 分析方法

分析したインタビュー内容は逐語録として文字起こしを行い、質的記述法に基づいて分析を行った。分析は、質的記述的分析の経験が豊富な研究者の指導の下で行った。

5) 倫理的配慮

本研究は、桜美林大学および桜美林大学大学院の倫理審査委員会の承認（倫理審査番号： 24062）を得ており、個人情報の保護および調査協力者の同意取得等、承認内容に基づいて適切に実施された。

3 結果

1) 研究参加者の概要

参加者は 14 名であった。酸ヶ湯温泉が 3 名、玉川温泉は 11 名であった。

2) 分析結果

5つのカテゴリが抽出された。その5つとは、【現実世界からの離脱】【湯治の場で社会関係に支えられる】【温泉の効果を実感する】【経済負担を気にしない】【西洋医学の限界の認知と不信】であった。

【西洋医学の限界の認知と不信】は、がんや難病の湯治客においてのみ特有のカテゴリとして抽出された。さらに、【湯治の場で社会関係に支えられる】については、がん・難病を抱える湯治客では、〔苦しみを分かちあうことができる〕〔他の人の経験について情報交換ができる〕〔利用者を励ますことで貢献できる〕〔看護師やスタッフの対応がよい〕といったサブカテゴリから、それ以外の湯治客では、〔仲間との交流ができる〕〔スタッフの親しみのある接客〕というサブカテゴリから抽出された。【温泉の効果を実感する】については、がん・難病を抱える湯治客に特有のサブカテゴリとして、〔医学所見が改善〕および〔症状が改善〕が抽出された。このようにサブカテゴリの内容に、がん・難病とそれ以外の湯治客では、違いが見られた。

4 考察

本研究の結果から、第1に、「現実世界からの離脱」ががん・難病の湯治客とそれ以外の湯治客の双方に共通して見られたことから、心理的回復の場として機能していることが示唆される。第2に、重篤な疾患を抱える高齢者にとっての「社会的支え」として湯治場の意義である。【湯治の場で社会関係に支えられる】の中でも、がん・難病の湯治客が〔苦しみの共有〕や〔情報交換〕、〔他者への貢献〕に強い意味づけをしていた点は、湯治場が精神的ケアやピアサポートの場として機能していることを示している。第3に、がん・難病の湯治客における〔医学所見の改善〕や〔症状の改善〕は、温泉に対する身体的効能への期待が高いことを示している。第4に、湯治における「経済的負担」の再定義の必要性である。【経済的負担を気にしない】という共通のカテゴリからは、湯治が経済的には負担にならないのではなく、「健康への投資」として認識されていることが読み取れる。特に高齢者にとっては、医療費や介護費用の増加が現実的な課題である中で、湯治が予防的・補完的な健康行動として位置づけられている可能性があることから、保険適用の是非も含めた、公的な支援の在り方を検討する余地がある。第5には西洋医学に対する不信と湯治への代替的な期待である。【西洋医学の限界の認知と不信】というカテゴリは、がん・難病の湯治客に特有であり、湯治が医療の限界を補う最後の手段として選択されている実態を示している。

謝辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力をいただきました対象者の皆様、ならびに酸ヶ湯温泉と玉川温泉の責任者とスタッフの皆様に深謝申し上げます。本論文の作成にご指導賜りました桜美林大学大学院国際学術研究科の杉澤秀博先生、渡辺修一郎先生、長田由紀子先生に心から感謝申し上げます。

文献

一般社団法人日本温泉気候物理医学会 (2023). 最新温泉医学, 三美印刷. 一般社団法人日本温泉科学会 (2022). 日本の温泉書店.

石川理夫 (2001). 温泉で、なぜ人は気持ちがよくなるのか, 講談社.

植田理彦 (2000). 健康と温泉. 学術の動向, 5(3), 80-84.

内田彩, 山崎瑞季, 安藤巖乙, 無量井春菜. (2022). 東北地方における温泉文化の変容について—環境省「10年後の混浴プロジェクト」を通して—. 日本観光研究学会全国大会学術論文集 第37回日本観光研究学会全国大会 (pp. 209-214). 日本観光研究学会.

鏡森定信 (2006). 泉質別にみた温泉の効果. 日本温泉気候物理医学会雑誌, 69(4), 223-233.

加藤礼識, 野田龍也, 今村知明 (2015). 湯治目的の重症患者が集う温泉地と地域医療体制の協調に関する研究. 日健開発財団研年報, (36), 35-44.

小堀貴亨 (2008). 東北・九州地方における湯治場の機能変化. 国士舘大学地理学報告, (16), 89-98.

合田純人, 森繁哉 (2011). 温泉からの思考, 新泉社.

佐佐藤健と取材班 (2003). 生きる者の記録. 毎日新聞社.

関口陽一, 早坂信哉 (2024). 短期間の温泉地滞在における入浴以外の活動の主観的な効果: 全国「新・湯治」効果測定調査プロジェクトデータに基づく二次研究. 日本健康開発雑誌 45, 21-31.

高橋一喜 (2014). 日本一周 3016 湯, 幻冬舎.

永岡圭介 (2019). 保養創造としての現代の湯治—肘折温泉郷の事例. 現代民族学研究, (11), 75-85.

永岡圭介 (2021). 現在の湯治における保養についての一考察. 現代民族学研究, (13), 57-67.

永岡圭介 (2022). 湯治場の地域社会的構成とその展開——〈たたずまい(訪・住)〉の共同態に関する一考察—. 日本温泉科学会(2019). 現代湯治—温泉ガイド—, 淡交社.

ふじみとむ (2003). 玉川温泉ガン闘病日記, 無名舎出版.

藤本和弘 (2019). 温泉地において長期滞在需要を高めるには何が必要かー現地調査に基づく考察から. 日本温泉気候物理医学会雑誌, 82(2), 92-99.

堀 桂子 (2023) インバウンド観光振興によって湯治の継承ー鉄輪温泉地区の事例ー第38回日本観光研究学会全国大会学術論文集.

前田眞治 (2022). 玉川温泉湯治の手引き. 改訂版, 玉川温泉研究会.

柳澤融, 野口順一, 足澤輝夫, 杉江忠之助 (2007). 玉川温泉療養がん患者の感情プロフィール検査 (POMS) について. 日本温泉気候物理医学会雑誌, 70(2), 77-83.

山村順次 (2002). 湯治場の現代的意義と課題. 総合観光研究, 1, 21-31.